

従えての旅行であった。これ等旅行に際しては事前通達によつて、大きな峠には休息のために仮屋が建てられたというから、古くから交通の要所であったことに間違いない。今は道路網の整備と交通機関の発達によつて、昔の峠道など利用する者はいない。

元越山を南南西に三、四百米程下がった所に十二段という地名の開けた土地がある。附近一帯は勾配が至つて緩やかで面積も広く、元越山に最も近い所には湧き水もあり、古代人の住居跡地ではなかつたかなど、疑問を抱くような謎めいた土地でもある。享保の昔六代高慶公がこの附近から山裾にかけて、大掛りな狩りをしたという記録も残っている。

元越山、それは木立のシンボルであり母なる山でもある。

月に観て母を想うや元越山

表紙解説

柄鏡 (えかがみ)

鏡は、古代においては、祭器であり、また首長の権威のシンボルでもあった。

日本の鏡は、中国、朝鮮からもたらされた舶載鏡、それを模して造った仿製鏡、日本独特の和鏡とに分けられ、製作してから副葬品として埋納されるまで長く使用されていたものは、伝世鏡と呼ばれている。

柄鏡は、柄のついている金属鏡の一つで、西欧では古いが、中国では宗の時代から、日本では室町末期から用いられ、江戸時代に隆盛をみた、室町時代のもものは柄が長く、その先に穴があいているが、江戸時代には柄は広く短かくなつたとされる。

洋の東西を問わず、美しくありたい、見せたいと希う女性の心強い協力者として、常に身近に置かれた品の一つであろう。

写真の柄鏡は、津志河内の三股家に代々伝わるもので、直径二十四センチ、柄の長さ九センチ八ミリ、厚さ約三ミリで、松竹梅に鶴亀の絵が浮彫され相生の文字とともに天下一藤原義信作の銘が刻されている。

解説 吉田齊次郎